

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Verification of a Temporal Change Model of Expression Frequencies in the Minutes of the National Diet of Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 昌也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002583

国会会議録における言語表現の出現頻度に関する 時間的変化モデルの検証

山口昌也 (国立国語研究所音声言語領域) †

Verification of a Temporal Change Model of Expression Frequencies in the Minutes of the National Diet of Japan

Masaya YAMAGUCHI (Spoken Language Division, NINJAL) †

要旨

筆者は、言語表現の出現頻度に関する時間的変化モデルの構築を目的として、国会会議録(衆議院・予算委員会, 衆議院・本会議, 1947-2012)を対象に、出現頻度の時間的変化が多い言語表現を抽出し、その特徴を分析してきた。その結果、「会議特有の表現の減少」や「改まった場を想定しない表現の増加」の傾向があることが明らかになった。この結果に基づき、聴衆としての国民が受け入れやすい表現に変化するという、メカニズムを持つモデルを作成した。本稿では、モデルの精緻化を行うため、発言者の肩書、発言の種類(例: 質問, 回答, 趣旨説明)などをパラメータとして、五つの仮説を立て、実際のデータで仮説を検証した。検証の結果は、いずれの仮説に対しても矛盾するものではなかった。

1 はじめに

本研究は、国会会議録を対象にして、実データに基づき、言語表現の時間的変化のモデルを検証するものである。

国会会議録は、戦後から現在までの話し言葉を記録した貴重な資料として、これまでに多くの言語研究(松田, 2008a; 服部, 2014)で利用されており、経年変化についても、さまざまな研究の蓄積(茂木, 2008; 松田, 2008b; 南部, 2008; 服部, 2009)がある。これら既存の研究に対して、本研究の特徴は、分析対象をあらかじめ特定の言語要素に限定するのではなく、実際に変化している表現をデータに基づいて抽出し、その結果に基づいて、経年変化のモデルを構築することを目指していることである。

これまでに、筆者は山口(2017)において、国会会議録(衆議院・予算委員会, 1947-2012)を対象に、出現頻度の大きな言語表現を抽出し、その結果に基づいて、言語表現の時間的変化のモデルの雛形を作成した。抽出された言語表現の特徴としては、「会議特有の表現」の減少や「改まった場を想定しない表現」の増加が見られた。そのため、作成した言語変化モデルは、聴衆としての国民が受け入れやすい表現に言語表現が変化するというメカニズムを持つ。

本研究では、この言語変化モデルを基本に、発言者の肩書、発言の種類などをパラメータとして五つの仮説を立て、実際のデータで仮説を検証することにより、モデルの精緻化を図る。

2 時間的変化の特徴とモデル化

2.1 山口(2017)における分析

山口(2017)では、「出現率の時間的変化の大きい表現」を抽出し、それらの特徴を分析している。ここでいう表現とは5gramの文字列である。抽出方法の概略は、次のとおりである。本研究で用いる抽出方法は山口(2017)と基本的に同一なため、詳細についてはそちらを参照されたい。

† <http://www2.ninjal.ac.jp/masaya>

1. 国会会議録(衆議院・予算委員会, 1947-2012)を四つの期間に分割し, 最初の期間(1947-1965, 以後「期間1」とする), 最後の期間(1999-2012, 以後「期間4」とする)の5gramの出現頻度の変化を比較する。
2. 変化の大きな表現に対して, 1年単位で全期間の出現頻度の変化を計測し, 表記基準の変更(例: 「我々」「われわれ」)などの特殊要因による頻度変化を含む表現を除外する。

以上の方法で, 抽出した表現を次の二つに分類した。これらは, いずれも, 聴衆としての国民が受け入れやすい表現に変化している。そこで, この変化メカニズムを基本とした出現頻度の時間的変化モデルを作成した

- 会議特有の表現の減少
(例: 「であります」「おるといふ」「おきまして」「しましては」「いうものは」)
- 改まった場を想定しない表現の増加
(例: 「んですけれ」「いるんです」「ないんです」)

2.2 基本モデル

前節で述べたメカニズムをモデル図として表現したのが, 図1である。モデルには「国会出席者」と「国民全体」の二つの構造があり, 入れ子構造になる。

このモデルにおいて, 出現頻度の時間的変化は, 聞き手の範囲が「聞き手1」だけから「聞き手2」を含めた範囲に拡大することによって発生すると説明される。まず, 従来, 話し手が国会出席者の範囲内の聞き手1を想定していたため, 会議特有の表現が用いられていた。しかし, テレビやラジオなどのメディアの発達により, 徐々に聞き手2を想定しはじめたため, 聞き手2に理解されにくい表現が減少するとともに, 国会という改まった場を想定しない表現が多くなる, という説明である。

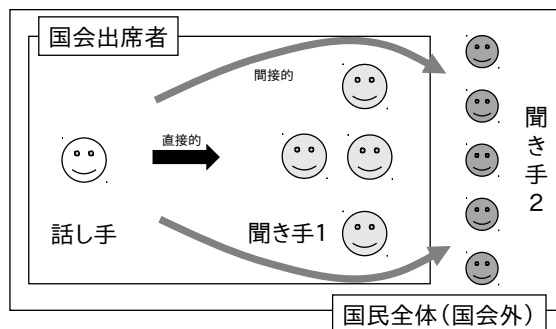


図1 出現頻度の時間的変化の基本モデル

ただし, 話し手, 聞き手1は, 会議の発話状況によって異なる(参議院, 2014a; 衆議院, 2014b)。例えば, 議案を担当大臣が説明する発話状況であれば, 話し手は主として国務大臣, 聞き手1は会議参加者となる。一方, 質疑応答の質問の場面では, 話し手は委員, 聞き手1は主として政府関係者となる。

しかし, 山口(2017)では, 時間的変化の大きい表現の抽出に関して, 話し手, 聞き手1といった, モデル中のパラメータの値を考慮していなかった。そこで, 本稿では, 発言者の肩書き, 発言の種類(質問, 回答)などを考慮した分析を行うことによって, モデルを検証・洗練化する。

3 モデルの検証

3.1 仮説

モデルの検証の方法としては、いくつかの発話状況を仮定した上で、図1の基本モデルに則り、五つの仮説を作成し、仮定した発話状況における、表現の時間的変化を推測する。用意する状況は、次の三つである。この後の節では、それぞれについて、詳しく説明する。

状況1 質疑応答において、国務大臣が委員からの質問に回答する状況

状況2 質疑応答において、委員が政府関係者に質問する状況

状況3 質疑応答において、国務大臣以外の出席者が委員の質問に回答する状況

3.1.1 状況1

まず、状況1は質疑応答の場面において、大臣(内閣総理大臣を含む)が委員からの質問に答える状況である。典型的な場面としては、担当の国務大臣が議案の趣旨説明 → 委員が質問 → 担当の国務大臣(話し手)が委員(聞き手1)に回答という場面が挙げられる。

このような場面での回答は、政府の政策の成果や、話し手の政治的な主張を含む。そのため、話し手が聞き手の委員だけに回答するというよりも、国民全体に向けた回答ということになる。したがって、聞き手1は質問を行った委員に対してだけでなく、予算委員会の参加者となる。また、聞き手2は国民全体ということになる。

この状況は、基本モデル(図1)で想定する状況と違いがないため、言語表現の時間的頻度変化として、山口(2017)で示したような「会議特有の表現の減少」と「改まった場を想定しない表現の増加」が現れるものと思われる(仮説1)。

ただし、聞き手1と聞き手2の関係を詳しく見ると、敬意表現については、より詳細な予想が可能である。具体的には、聞き手が聞き手1から聞き手2に拡大すると、話し手が想定する聞き手に、国会外の不特定多数の間接的な聞き手が含まれるようになることに着目する。この状況では、特定の聞き手を想定した敬意表現を用いることができないため、聞き手1だけを想定した状況よりも高い敬意表現が選択されることが予想される(仮説2)。同種の議論は(南, 1974)の「敬語選択の条件」でも行われており、「1対多数」「間接的手段」の状況では、敬語の要素が多く現れることが言及されている(p.270-271)。

3.1.2 状況2

状況2では、委員(話し手)が政府関係者に質問する状況(図2)である。質問なので、個々の発言ごとに見れば、聞き手1は質問する相手であり、多くの場合、1~数名の特定の範囲に限定されると思われる。典型的な聞き手1の例としては、議案の提案者である担当国務大臣や、政府委員、政務次官などである。

聞き手2については、状況1と同様、国民である。しかし、次の二つの点が異なる。

一つは、状況1では話し手の発言の対象に聞き手2が含まれていたのに対して、状況2では話し手の発言(質問)は聞き手2に対する発言ではないことである。これにより、発言に含まれる敬意表現は、状況1よりも、聞き手1と話し手との関係に基づいて選択される。したがって、時間的変化に基づく聞き手2の拡大による影響は、敬意表現に関しては限定的であると考えられる(仮説3)。

もう一つの違いは、話し手の想定する(発言を聞いて欲しい)聞き手2の範囲である。聞き手2の範囲は、状況1よりも限定されると思われる。なぜなら、質問は話し手自身や、所属する政党の主張が反映されたものであり、話し手が質問したことを評価して欲しい相手、つまり、支持者や支持して欲しい

相手に向けられたものになると推測されるからである。したがって、時間的変化に基づく聞き手2の拡大による影響は、限定された聞き手2と話し手との関係に依存したのになると予想される(仮説4)。

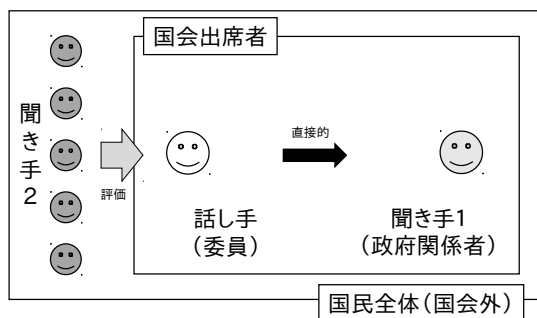


図2 出現頻度の時間的変化のモデル (状況2の場合)

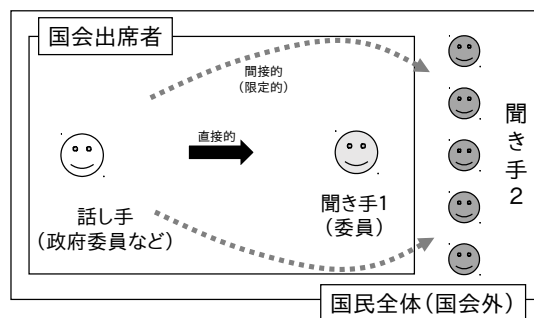


図3 出現頻度の時間的変化のモデル (状況3の場合)

3.1.3 状況3

状況3は、質疑応答において、国務大臣以外による出席者(話し手)が委員(聞き手1)の質問に回答する状況(図3)である。対象となる話し手は多様だが、ここでは大臣を補佐する立場の出席者(例：政府委員¹、副大臣)を対象とする。

状況3は、質問に対する回答を行うという点では状況1に類似する。しかし、政府委員をはじめとして、「大臣に代わって所管事項について答弁し、説明を行なう」(デジタル大辞泉, 2019)役割を担うため、次の発話例のような、国務大臣と比較して、実務的な回答を行うことになり、ひいては、聞き手1に対する直接的な回答になると思われる。したがって、時間的変化に基づく聞き手2の拡大による影響は、状況1よりも限定的で、その表現は、聞き手1と話し手との関係に依存したのになると予想される(仮説5)。

大臣の御説明に補足いたしまして御説明申し上げます。お手元に一枚の紙が行っておりますが、それで御説明いたします。

今回出しました補正予算は一般会計、特別会計及び政府関係機関に関係するものでありますが、その重要なものは言うまでもなく一般会計の分でございまして、その分をこの表で表わした次第であります。

公共事業費百六億六千万円、そのうち災害復旧費が八十五億であります。

(河野一之政府委員, 衆議院予算委員会第12回09号, 1951-10-30)

3.2 方法

3.3 対象とする資料

本研究で使用する資料は、山口(2017)と同様に、全文検索システム『ひまわり』用に作成された『国会会議録』パッケージ(20140327_rev20170612)²である。このパッケージは、『国会会議録検索システム』³に収録されている国会会議録のうち、衆議院・参議院の本会議・予算委員会の会議録(第1回1号～第182回2号, HTML版)をダウンロードし、『ひまわり』用にインポートしたデータである。

¹ 「国会審議活性化法の成立で副大臣・政務官制度が創設されたのに伴い、2001年に廃止された」(デジタル大辞泉, 2019)

² <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc>の全文検索システム『ひまわり』のページで公開している。

³ http://kokkai.ndl.go.jp/KENSAKU/swk_startup.html

3.4 分析対象の表現の抽出

出現頻度の時間的変化の大きい表現の抽出方法は山口 (2017) と同一であるが、3.1 節で述べた三つの状況ごと独立して抽出した。『国会会議録』パッケージ検索時における状況の指定は、発言者の「肩書き」を次のように限定することにより行った。

状況 1 国務大臣, 國務大臣, 内閣総理大臣

状況 2 委員

状況 3 政府委員, 副大臣, 説明員, 副大臣, 内閣官房副長官, 政府特別補佐人, 大臣政務官, 政府参考人

ただし、これらの条件だけでは、設定した状況の発言のみを抽出することはできない。例えば、国務大臣は質疑応答の状況で発言するだけでなく、趣旨説明の際にも発言するため、趣旨説明での発言も調査対象に含まれてしまう。また、『国会会議録』パッケージに付与されている情報だけでは、機械的に状況を制限することは難しい。

そこで、例外的な状況がどれくらい含まれるかを期間 1, 期間 4 から 1 年ずつ (1960 年と 2010 年) 選び、目視で会議内容を確認することによって、例外の程度をおおまかに把握することにした。次の例は、1960 年 (第 34 回 01 号～第 37 回 06 号) の会議内容の調査結果である。

34:01	趣旨説明 (補足説明含む)	35:01	閉会審査の件
34:02-10	質疑応答	35:02	委員長就任挨拶
34:11	討論, 採決	36:01	質疑応答
34:12-15	質疑応答	37:01	理事互選
34:16	分科会報告, 質疑応答	37:02	趣旨説明 (補足説明含む)
34:17-18	質疑応答	37:03-05	質疑応答
34:19	動議, 討論, 採決	37:06	動議, 討論, 採決

このように、質疑応答以外の発話状況が含まれる。質疑応答以外の発話 (発話文字数) の割合 (%) を状況 1～3 の話し手別に集計すると、表 1 のようになった。

表 1 質疑応答以外の発話 (発話文字数) の割合

年	状況 1	状況 2	状況 3
1960	5.6	8.7	48.5
2010	8.4	9.5	5.9

質疑応答以外の発話文字数は、おおむね 10% 以下におさまっているが、1960 年の状況 3 における割合が 48.5% と突出した結果になった。これは、34 回 01 号と 35 回 01 号における趣旨説明で、政府委員が趣旨説明に対して補助的な説明を行ったことが原因であった。この他に問題となりうるのは、主に、国務大臣の趣旨説明 (状況 1 の例外)、委員による動議・討論・分科会報告 (状況 2 の例外) である。なお、これら以外の会議内容 (「理事互選」「委員長就任挨拶」など) は、大部分が委員長の発言のため、分析に与える影響は小さい。

以上のように、現状の抽出方法は完全ではなく、特に状況 3 での分析結果の解釈は注意を要する。ただ、問題として挙げた、趣旨説明に対する政府委員による補助的な説明は、次のように実務的な説明が

多く、これは前述 (p.4) の河野政府委員の回答 (これは趣旨説明に対する補助的な説明ではない) と、実務的であるという点で、類似していることも付け加えておく。

お手元に配付をしてございます「昭和三十五年度予算の説明」という書類がございますから、これをごらんいただきまして御説明申し上げます。

最初に一般会計の予算の規模、一ページの左側の下から始まるわけですが、現行税法の場合におきます租税印紙収入の三十四年度に対しまする増加の見込額、これが千六百六億であります。税外収入も同じく三十四年度に対しまする増加見込額が百六十倍であります。

(石原周夫政府委員, 衆議院予算委員会第 34 回 01 号, 1960-02-04)

4 結果

4.1 抽出された言語表現

抽出された言語表現を状況別に示す。かっこ内の数値は、期間 1・期間 4 との間の正規化出現頻度 (10 万字あたりの出現頻度として正規化) の変化率 r である。ここでは、スペースの関係上、上位・下位 25 位 (ただし、 $|r| \geq 70$) までを示す。また、低頻度の文字列は変動が大きくなる場合があるため、いずれかの期間で正規化出現頻度が 10 万字あたりの出現頻度が 20 以上の言語表現に限定している。

$$r = (f_{tail} - f_{head}) / \max(f_{head}, f_{tail}) \times 100$$

なお、 r は、 $-100 \leq r \leq 100$ の値を取り、 $r > 0$ の場合は 2 期間の間で増加、 $r < 0$ の場合は減少していることを表す。 f_{head} 、 f_{tail} は、それぞれ、期間 1、期間 4 における正規化出現頻度である。

また、山口 (2017) で指摘した、表記方法に依存する時間的頻度変化のうち、今回は「促音・拗音の表記」「漢字・ひらがな表記」のみを判定し、該当する言語表現を除外した。さらに、言語表現の先頭、もしくは、末尾以外の文字が同一の表現 (例:「せていただ」「させていた」) は、変化率の絶対値が大きい方のみを掲載している。

■状況 1(増加) しっかりと (99.9), をさせてい (98.6), ふうに思い (98.5), せていただ (97.6), いただきました (97.2), っています (96.3), いるところ (95.2), いただいた (95.0), このように (94.9), そういった (94.7), うに思って (93.8), ですが (93.0), ところで (92.6), ろでござい (92.4), おっしゃっ (90.9), ければいけ (90.8), いただきま (90.8), いたふ (90.7), まいたい (90.3), っていると (89.8), をしている (89.3), されている (87.6), ましたけれ (87.2), たけれども (85.7), いるわけで (85.2)

■状況 2(増加) ふうに思い (98.9), んですけれ (98.9), 思うんです (98.6), いるんです (98.1), ないんです (97.9), させていた (97.6), んですぬ (97.1), っているん (97.1),。そして、(96.4), ています。(96.1), んですが、(95.5), んですよ。(95.0), んでしょう (94.7), んじゃない (94.2), てください (92.9), 思っており (92.2), いただきま (91.8), に思います (91.5), ていただい (91.4), いたふ (89.8), いるわけで (88.2), いました。(88.0), んですか。(88.0), しょうか。(83.3), ましたけれ (82.8), のかという (80.5), やないです (80.0)

■状況 3(増加) ているとこ (98.3), えさせてい (96.7), ころでござ (96.4), るところで (95.2), うふうに思 (94.4), 知しており (93.4), せていただ (93.0), をしている (92.9), そういった (91.6), されている (90.7), ざいますけ (89.8), いただいて (88.5), ましたけれ (86.8), おりますけ (85.1), たけれども (85.1), うことで (85.0), ったという (84.8), いるという (84.8), れども、そ (83.4), ますけれど (83.3), いました。(81.6), それから、(80.9), たがいまし (80.5), とでござい (79.3), 思っており (78.1)

■状況 1(減少) おるのであ (-99.7),、そして (-98.9), しておるの (-98.2), いのであり (-98.0), 思うのであ (-97.5), るのでござ (-96.2),、かように (-95.5), ればならぬ (-95.4), おる次第で (-93.9),、ただいま (-93.4), 第でありま (-93.3), いたしたい (-91.1), 考えておる (-90.3), ます。ただ (-86.2), ます。しか (-84.6), ります。こ (-76.0), といたしま (-75.8), ておるとい (-75.4), ておるわけ (-75.3), 答えいたし (-74.2),

■状況 2(減少) おるのであ (-99.4), ればならぬ (-99.0), うのであり (-98.1), しておるの (-98.0), たいのであ (-97.8), されておる (-93.0), ると思うの (-92.3), おるといふ (-91.9), うものは, (-90.4), るのです。 (-89.8), におきまし (-89.0), たしまして (-88.6), といたしま (-88.0), のでござい (-87.6), いたしたい (-85.8), においては (-84.0), ましても, (-83.5), うでありま (-83.4), こういふよ (-83.3), るならば, (-81.4), ましては, (-81.0), いたしてお (-80.2)

■状況 3(減少) おるのであ (-99.7), たのであり (-99.5), ことに相な (-99.1), るのでござ (-97.3), おる次第で (-96.6), 第でありま (-94.8), たしておる (-94.2), 計上いたし (-91.3), るわけであ (-87.4), す。しかし (-87.2), あります。 (-84.3), ければなら (-80.9)

4.2 仮説との比較

4.2.1 状況 1

「状況 1(減少)」には, 下の例のように「～オル」「～デアリマス」を含む, 会議特有の表現が減少している。また, 「状況 1(増加)」には「～フウニ」「～ケレドモ」のように「改まった場を想定しない表現」が見られる。これらの結果は, 仮説 1 に反しない。

- 状況 1(減少): 「おるのであ (ります)」「しておるの」「(お) るのでござ (います)」「おる次第で」「(次) 第でありま (す)」
- 状況 1(増加): 「ふうに思い」「(ふ) うに思って」「ですけど」「(な) いというふ (うに)」「たけれども」

その一方で, 山口 (2017) で指摘した, 「いるんです」「ないんです」のような「ん」を含む, よりくだけた表現の増加は, 「状況 1(増加)」には現れず, 「状況 2(増加)」のみに現れる。これは, 状況 1 では一部の「改まった場を想定しない表現」の増加が抑制されていることを示すものである。

また, 「状況 1(増加)」には, 「をさせてい (ただく)」「ところでご (ざいます)」「おっしゃっ」「まいりたい」のような敬語表現が多く含まれる。このような敬語表現は, 山口 (2017) では, 「改まった場を想定しない表現」の増加に反する, 例外として扱っていたものである。

このような, 山口 (2017) の結論との二つの差異は, 「(聞き手 2 を考慮することから) 聞き手 1 だけを想定した状況よりも高い敬意表現が選択される」という仮説 2 によるものと考えても, 矛盾しない。また, 「状況 1(増加)」中で変化率 1 位の「しっかりと」は, 次のように, 政府側の政策の有効性を聞き手 2 にもアピールするものとなりうるため, 聞き手 2 を考慮するという, 仮説 2 を支持するものである。

我々としましては, 予想以上に厳しいデフレであるということは認識をしております。であるからこそ四本柱の改革と、さらには政府、日銀が一体となって政策を総動員することによって、二〇〇五年ぐらいにはこれを克服したいというシナリオも立てまして、改革をしっかりと行っていくことを目指しているつもりでございます。

(竹中平蔵国務大臣, 衆議院予算委員会第 156 回 09 号, 2003-02-12)

4.2.2 状況 2

前節で述べたように, 「状況 2(増加)」には, 「んですけれ」「思うんです」のように, 「ん」を含むくだけた表現が含まれる。これは, 話し手の委員と, 聞き手の国務大臣との関係により敬意表現が決定されていると考えられるため, 「時間的変化に基づく聞き手 2 の拡大による影響は, 敬意表現に関しては限定的である」という仮説 3 に反しない。

また、「状況2(増加)」には、「んですね。」「んですよ。」「てください」「んですか。」といった、質問の聞き手1に何かをせまる表現が含まれている。これらは、次のように使用状況によっては、聞き手1へ強いプレッシャーをかける表現となる。このような表現は、政府に対する話し手の態度を強調し、聞き手2の支持者や支持して欲しい相手へのアピールになると考えられる。このことは、仮説4を支持する左証の一つであると考えられる。

これはどこへ消えたんですか、説明してください。——時間がなくなるから早くしてください。
質問は事前にこのことを通告してあるんですよ、きちっと。言ってあるんですよ。
(石井紘基委員，衆議院予算委員会第145回21号，1999-07-15)

4.2.3 状況3

「状況3(増加)」「状況3(減少)」ともに、状況1と類似した言語表現が含まれている。ただし、「状況3(増加)」には「状況1(増加)」に含まれない「(し)たがいまし(て)」「(いう)ことでござ(います)」が含まれている⁴。

これらの表現は、次の例のように、聞き手1の質問に対する、直接的で、論理的な回答であり、「状況2(増加)」で見たような、聞き手2へのアピールとしての明示的な配慮は見受けられない。したがって、「時間的変化に基づく聞き手2の拡大による影響は、状況1よりも限定的で、その表現は、聞き手1と話し手との関係に依存したものになる」という仮説5を支持するものであると考えられる。

まず、暴走族の現状についてでございますけれども、暴走族の人員は年々少しずつ減少してきているところでございますが、グループも小規模化してきておりまして、したがって逆にグループ数は増加の傾向にあるといったような状況でございます。
(坂東自朗政府参考人，衆議院予算委員会第151回11号，2001-02-23)

したがって、私からの答弁というのは御遠慮申し上げたいわけでございますが、いずれにいたしましても、一般的に申し上げまして、刑事事件として取り上げるべきものが認められれば、それについてはきちっと対応をするということでございます。
(古田佑紀政府参考人，衆議院予算委員会第151回6号，2001-02-15)

5 おわりに

本稿では、山口(2017)で提案した出現頻度の時間的変化モデルを基本として、五つの仮説を設けて、実際のデータに基づいて検証し、モデルの精緻化を行った。検証の結果は、いずれの仮説に対しても矛盾するものではなかった。ただし、3.4節で述べたように、分析対象の表現の抽出には一部問題がある。今後、検証方法の改善を行ったのちに再検証する予定である。

謝 辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」、および、科研費基盤研究(B)『「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に

⁴ これらの表現の他に、「(証言などを控)えさせてい」のように、話し手が参考人である場合の特徴的な表現が現れる。

関する実証的研究』の一環で行われた。本稿執筆にあたり、専修大学の丸山岳彦氏にさまざまなご意見をいただいた。深く感謝いたします。

文 献

- 松田謙次郎 (編) (2008a). 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房.
- 服部匡 (2014). 『現代日本語の通時変化』 pp. 21-47. 朝倉書店.
- 茂木俊伸 (2008). 「国会会議録における行政分野の外来語」 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房 pp. 85-110.
- 松田謙次郎 (2008b). 「東京出身議員の発話に見る「ら抜き言葉」の変異と変化」 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房 pp. 111-134.
- 南部智史 (2008). 「「が/の」交替における個人内変化の研究」 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房 pp. 135-157.
- 服部匡 (2009). 「「～シテイル」と「～シテオル」-戦後の国会会議録における使用傾向調査」 計量国語学, 27:1, pp. 1-17.
- 山口昌也 (2017). 「国会会議録における言語表現の時間的変化の予備的分析」 言語資源活用ワークショップ 2017 予稿集, pp. 304-312.
- 参議院 (2014a). 『国会のしくみと法律ができるまで! 委員会の審査』, <http://www.sangiin.go.jp/japanese/kids/html/shikumi/index.html>. アクセス日 2019-07-29
- 衆議院 (2014b). 『議案の審査』, http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_annai.nsf/html/statics/kokkai/kokkai_gian.htm. アクセス日 2019-07-29
- 南不二男 (編) (1974). 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- デジタル大辞泉 (2019). 『政府委員』, <https://kotobank.jp/dictionary/daijisen/>. アクセス日 2019-07-26